

土木学会選奨土木遺産 県内唯一のRCローゼ桁橋

た かつ の 高 角 橋



高津川と益田川の下流に位置する益田市一帯は、有力な豪族であった益田氏によって12世紀末から石見の中心として発展しました。山城「七尾城」や居館「三宅御土居」跡にその権勢を見ることができますが、関ヶ原の戦い（1600）後は、浜田藩と津和野藩の境界の在郷町となり、洪水の度に両藩による治水施設をめぐる争いが伝えられています。津和野藩による河道変更改修により栄えていた舟運の起点は河口付近の高津で、そばの柿本神社へは渡船に頼っていました。

明治25年（1892）ようやく初代高角橋が架けられましたが、木造橋のため洪水の度に一部崩壊や流失を繰り返しました。

とりわけ大正8年（1919）7月4日の洪水では高角橋の増水が6mに達し、益田町は全町が浸水、町内の橋は全て流されました。この災害を機に島根県による高津川改修工事とともに永久橋の架設が計画され、昭和17年（1942）に5連鉄筋コンクリートローゼ桁橋が完成しましたが、翌18年9月台風による未曾有の大洪水で堤防はいたるところで決壊し、沿岸平地のほとんどが水没、108名（益田町）の人命が奪われました。架けられたばかりの高角橋は流失を免れたものの、この橋が堰となって上流の堤防を決壊させる要因ともなりました。

建設省による災害復旧工事は河床掘削、築堤、護岸整備などで、高角橋架橋地点周辺では右岸堤防（須子町）を70m後退させ、川幅を拡張させることになり、高角橋も既存のローゼ桁橋を嵩上げし、右岸側を3径間ゲルバー桁（66.62m）で継ぎ足すことが採用されました。嵩上げは5径間の橋桁を油圧ジャッキで1.1～1.6m持ち上げるという当時としては大工事でしたが短期間で行われ、昭和27年（1952）に完成しました。その後、歩行者の安全確保のため、昭和43年に側道橋が付られています。

昭和9年の室戸台風の災害復旧事業で架けられた大原橋（岡山市）は9連の鉄筋コンクリートローゼ橋に鋼製のトラス橋が1連あります。当初の設計では全て鋼製でしたが、戦時下で鉄材を節約する必要からコンクリートローゼ橋になったということです。同時期の高角橋も同じ理由かと思われます。ただ、高角橋はコンクリート素材にもかかわらず「アーチリブの窪み」によって立体感や奥行きを感じさせてくれます。この大原橋には無いデザインは梁にまで施されており、高角橋の設計者のこだわりが感じられるともいえます。完成から60数年を経た今も人や物流の往来に寄与するとともに、橋の下の高水敷は柿本神社八朔祭での流鏝馬神事など、地元の人々に利用されています。



高津川に映る5連のアーチが美しい全国的にも大規模で、かつ島根県では唯一のRCローゼ桁橋。上流側の側道橋は1968年建設。

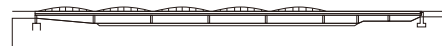
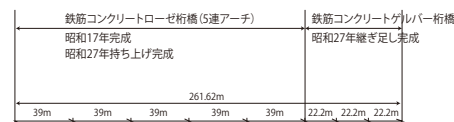
位置図



概要

橋梁形式 ……（本橋）鉄筋コンクリートローゼ桁橋
（継ぎ足し部）鉄筋コンクリートゲルバー桁橋
橋 長 ……全長261.62m
うち 鉄筋コンクリートローゼ桁橋195m
ゲルバー桁橋66.62m
道路管理者 ……島根県
道路幅員 ……（車道部）車道4.5m＋路肩0.5m＝5.0m
（歩道部）2.0m

参照：土木紀行「益田・高津
『高角橋』改修の歴史」（『建設
マネジメント技術94』
2013.6）



橋梁側面図



鉄筋コンクリートローゼ桁嵩上げ中（上下写真）
写真提供：大畑熊助氏



立体感を感じさせるコンクリート製のアーチリブ